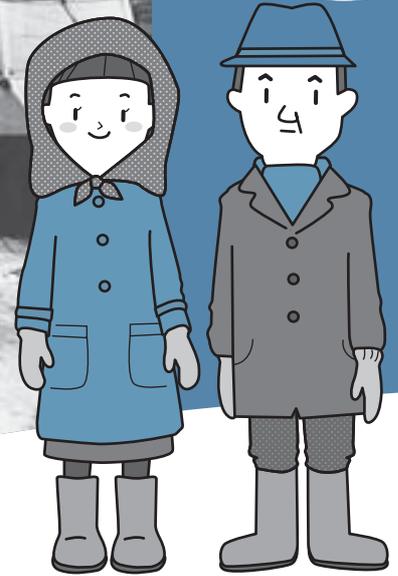


昔

昭和35年の中央区南5条西4丁目



暮らす を見直す時です

上の2枚の写真とイラストを見比べてください。
快適さを求め、雪対策をレベルアップしてきた結果、「除雪レベル」ばかりでなく、市民の装いも大きく変化してきました。
しかし、市の財政状況が厳しさを増す中、いつまでも快適さだけを求めていくことはできなくなっています。
今回は、皆さんからの提言や意見を参考にしながら、雪対策にとどまらず、雪国での暮らしを根本から考えてみましょう。



雪国に暮らす意識を持って！

北海道開発技術センター理事 原 文宏さん

札幌の雪対策は年々レベルアップしてきました。それに伴い、帽子や長靴を着用する人は減り、夏に近い格好で出歩く人を見掛けるようにもなりました。しかし、札幌は雪国です。膨大な費用とエネルギーを費やして、冬に夏場と同じような環境を確保する必要があるのでしょうか？



雪の学びを子供たちに

西区山の手南小学校教諭 新保 元康さん

札幌は世界でも類を見ない多雪都市です。にもかかわらず、子供たちには雪や冬について詳しく学ぶ機会が与えられていません。これは本当にもったいないことです。

雪に親しみ、冬の暮らしの楽しさや厳しさを子供のころから実感してこそ、冬の生活のマナーをしっかりと身に付けた大人へと成長するのです。

タウントークでの提言

11月6日(土)に「雪と市民生活」というテーマで開催された手稲区タウントーク。その中から、今後の雪との付き合い方を考えるに当たり、多くのヒントを含んだ意見を紹介します。

明確な役割分担とルールづくりが必要

北海道工業大学教授 笠原 篤さん



雪対策を効果的に進めていくためには、市民と行政の役割をより明確にする必要があります。市は道路の除雪、雪たい積場の確保など大きな部分を担う。一方、市民は路上駐車をしない、道路に雪を出さないなど身近な場面でのルールを作り、それを守る。

個人の自発的な行動に頼るマナーからルールへと移行させ、違反した場合の罰則を含む「雪条例」の制定も必要でしょう。